ポチ

ポチといふな犬の名なんど、僕が弟の中に可愛がってゐる犬の名なんどの。

僕あこれの事を考へると、何ども今でも胸が一杯になって、かゝる人間が生れて来て了よ。

今の子で頭と背中とに二ヶ所だけ墨汁と呼ばれるやうな白斑があって、耳の根元つと、面のまやくンど、上顎より下顎の方が出張ってゐるので、

下の歯が外に露出してゐる、ヒョットコ面の道化と犬とつとかち、愛嬌を有つと糸

母さんは暗闇と風とたくさんつけ。

二

母さんは伊作を聞いて、[illegible]ともあつて暗
はずかつと。寺、おとさんの向かつて言い
と伊作やつとら、トいホ條件で明納はしさ
ちらじかく、僕も安心して、旌を[illegible]祝して、母さ
んのねらて、伊曉と呼べさせしが、赤ど紙く
覚べることを知らずいで、これは母さんも
困つと、僕も困つこと。そのかく又お粥を搔さ
へやつらら、初めニ三匁桑とつッこんで、むせて、

言って下さいませ、明後日の紙を買つ
て来てあらと、みさんが行きつて問くさん
が、別に和方さんが代つて言つてくれさ
の。みんな知はの卵度みするから知ら
てつてさど、僕が帰れ　今度ちう　十度位効化する
かて、黄色から約束の靴を買つて貰へるくと
つて好いからッて和方と、田さんが行せて
の子は共わる仕ぶうでみ外のを持つてくるさ
らから、何つて中つさ方言と云つさんん
じかし、知文さん別沢流し御知してくれさ。

僕の父親さんは一体犬や猫を何より好かないもんだからね。

(三)

それからねえ君、僕が非常に苦労したんだ、ホチを育てるについて。初ての晩なんざ、僕が傍に寝ながら縁の下へ一晩僕を寝かして、それ上一寝らしておいたんだけど、つらぜ。クンクン泣いてばかりゐるじゃないの。お母さんを探すんだね。それがさも悲しさうで、僕が其声を聞くと何だか淋しいやうな、心細いやうな、厭な気持

みすてゝね、苦しかゞ僕のお母さんや、お父さ
んがフイ戻なくおつとられ行ぶらうと思ふ
と、何じう悲しくなつて僕と別れ注ちゃ
さんぢ。おゐさんは晩みお酒を飲むんぢ、彼
ちゃ
むとりうでも大きな新とかいて寝てるおとん
ぢかう、苦しゐも知てゐるさうれど、お母さん
は犬の唸声を聞まつて眠られなかつて、角
太と向いとり、たを向いとりしてゐるとりけが、僕
眠を覚え
の寝ゐが寝ぢとんぢから、お前れ行おるぢ
お腹でも痛いのかりてりおかう、ういひ、

拾うどやないもど、ポチの小屋うわいさ。
うで回しながらかいンぢと活すと、お母
さんは「えゝ此子はッ」て妨らく仔みて云はふか
つさが、其内るおゝみさんも服を見ーきゝんぢ
から、お母さんが其活をすると、おゝみさんはそ
れからちんと事を言つしけ。行でゝれど
から我の云ふ事と同かふきやを方ッて。僕お
ちゝ云はかる事とれど、其故ゝ限つて仔
ちゝ仔るお父さんの言ふ子が母ゝ保みて、僕
お心からおゝみさん母さん側に毒行ーふと

ばらせいと思ったッと。

ボチはりんまでうろうろして喋りてみるのでおえ

さんは所顔と起してひるを喜てて一ぱりと

けど、お母さんが、これが徒桜と一の愛さうし

ッて言ってるとこから、そんな作りやるふりして、

すこめて、それともんどかう、おじさんも座つ

てるつて、ちゃんみみたいな軒をかをごす。お

母さんも ちゃる家入つてるつと。ボチはりて

こ云って、明と手が抜れて一しきりパッタリ

帝国キッコウ、塩抜でも潜って那家一行ちや

つさだやないかと思うて、家とたつて雨戸と
明けて見ると、好い月夜ぢつけ。梅の下と竈
いて見ると、ポチは居ない。九くなりて姿俵
の出る所をつけが、僕ら窺くと、だつく
り苦と抜げて、急ぎ姉しさうこポチし出出
僕は家と抱上げて内へ入て頭巾と押付けと。ポ
チは小さな尻尾と振つて僕の頭巾と嗅めとり
け。そりや不憐いさ。不憐ふいことは僕ら紅
つてる れど、ぎつて、兄、ポチは嬉しかつ
て寝るこぶルの。今までお母さんを忘しかつ